

9月予報（全25枚）

病防第31号

令和7年（2025年）8月27日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

令和7年度（2025年度）発生予報第6号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和7年度（2025年度）病虫害発生予報第6号（9月予報）

I 気象予報：令和7年（2025年）8月21日福岡管区气象台発表

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	10	10	80
	降水量	40	40	20
	日照時間	10	30	60

II 【今後、注意すべき病虫害】

1 発生の概要

作物	病虫害名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
普通期水稻	穂いもち	やや少	並	少(－)	やや多～ やや少(±)	気温高(－) 降水並～少 (－)	巡回調査 防除員報告 (葉いもち)
	紋枯病	やや多	やや少	やや多(+)	並～やや少 (±)	気温高(+) 降水並～少 (－)	
	トビイロ ウンカ	やや少	並	やや少(－)	並～少(－)	気温高(+)	
	斑点米 カメムシ類	多	やや多	並(±)	並(±)	気温高(+)	予察灯調査 (大型カメム シ類)合志市 多(+)
大豆	ハスモン ヨトウ	やや少	少	やや少(－)	並(±)	気温高(+)	フェロモントラップ 調査 合志市 やや少 八代市 並 阿蘇市 並 山都町 やや少 (－)
	カメムシ類	やや多	やや多	並(±)	並(±)	気温高(+)	予察灯調査 合志市 多(+)

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
茶	炭疽病	やや少	やや多	少(－)	やや多～並 (±)	降水並～少 (－)	
	カンザワ ハダニ	やや多	多	やや多(+)	やや多～ やや少(+)	気温高(+) 降水並～少 (+)	ほ場調査 茶業研究所 やや少(－)
	チャノキイロ アザミウマ	やや多	並	やや多(+)	並(±)	気温高(+) 降水並～少 (+)	粘着トラップ 調査 合志市 やや多(+) ほ場調査 茶業研究所 少(－)
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	並	並	並(±)	並～やや少 (±)	気温高(+) 降水並～少 (+)	ほ場調査 茶業研究所 少(－)
	クワシロカイ ガラムシ	並	並	やや少(－)	並(±)	気温高(+) 降水並～少 (+)	
カンキツ	黒点病	多	やや多	多(+)	並(±)	降水並～少 (－)	ほ場調査 果樹研究所 やや多(+)
	かいよう病	やや多	やや多	やや多(+)	やや多～並 (+)	降水並～少 (－)	ほ場調査 果樹研究所 多(+)
	ミカンハダニ	やや多	やや多	並(±)	やや多～やや 少(+)	気温高(+) 降水並～少 (+)	ほ場調査 果樹研究所 やや少(－)
	チャノキイロ アザミウマ	並	並	やや少(－)	やや多～並 (±)	気温高(+) 降水並～少 (+)	トラップ調査 熊本市 やや少(－)
ナシ	黒星病	やや少	並	やや少(－)	やや多～やや 少(±)	降水並～少 (－)	
	ハダニ類	並	やや多	やや少(－)	やや多～並 (±)	気温高(+) 降水並～少 (+)	
	ナシヒメ シンクイ	やや多	やや多	－	やや多(+)	気温高(+) 降水並～少 (+)	トラップ調査 宇城市 やや多(+)
果樹全般	果樹カメムシ 類	やや少	やや少	－	カンキツ 並～やや少 ナシ やや少 カキ 並 (±)	気温高(+)	予察灯調査 合志市 並 宇城市 やや少 天草市 少 (－)
夏秋トマト	灰色かび病	やや少	並	少(－)	並(±)	降水並～少 (－)	



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
夏秋トマト	葉かび病	やや少	並	少(－)	並(±)	気温高(－) 降水並～少(－)	
	すすかび病	やや少	やや少	少(－)	並(±)	気温高(＋) 降水並～少(－)	
	うどんこ病	やや少	並	やや少(－)	やや多～並(＋)	降水並～少(－)	
イチゴ育苗ほ	炭疽病	並	並	やや多(＋)	並～やや少(±)	気温高(＋)	
	ハダニ類	並	並	やや少(－)	やや多～並(±)	気温高(＋)	
	アブラムシ類	並	並	やや少(－)	やや多～並(±)	気温高(＋)	
夏秋キュウリ	べと病	並	並	－	並(±)	気温高(－) 降水並～少(－)	
夏秋果菜類 (高冷地)	コナジラミ類	多	並	夏秋トマト多(＋)	夏秋トマト並(±)	気温高(＋)	
夏秋果菜類 (平坦地)	コナジラミ類	やや多	並	－	秋メロン やや多～並 夏秋ナス, 夏秋キュウリ 並(±)	気温高(＋)	
	アザミウマ類	並	並	－	夏秋キュウリ やや多 夏秋ナス, 秋メロン 並(±)	気温高(＋)	
野菜類全般	ハスモンヨトウ	並	並	夏秋トマト, イチゴ 並(±)	アスパラガス, イチゴ やや多～並 夏秋トマト, 夏秋ナス, サトイモ, キク 並(±)	気温高(＋)	フェロモントラップ調査 合志市 やや少 八代市 並 阿蘇市 並 山都町 やや少(－)



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
野菜類全般	オオタバコガ	並	並	夏秋トマト 並(±)	夏秋トマト, 夏秋ナス, 夏秋ピーマン, 夏秋キャベツ, キク 並 (±)	気温高(+)	フェロモントラップ 調査 合志市 やや少 八代市 並 阿蘇市 やや少 山都町 多 (±)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

2 予想発生量、根拠、対策等

◎普通期水稻

1) 穂いもち

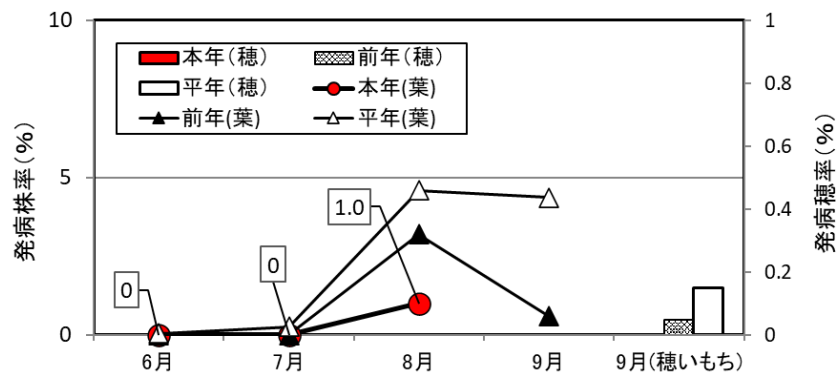
(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 8月の巡回調査では、葉いもちの発病株率1.0%、発病度0.3%（発病株率平年4.6%、発病度平年1.2%）と平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア ほ場を観察し、上位葉に葉いもちの発生がみられる場合は穂いもちの発生源となるので、直ちに薬剤防除を行う。



普通期水稻葉いもち及び穂いもちの発生推移

2) 紋枯病

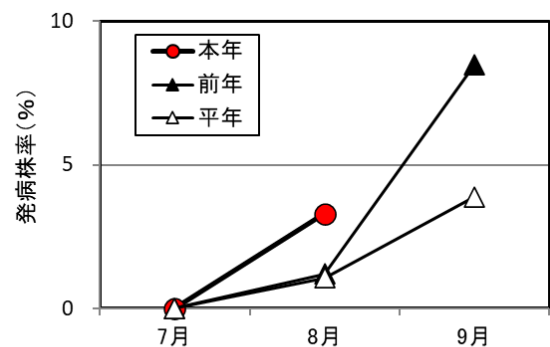
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 8月の巡回調査では、発病株率3.2%（平年1.1%）と平年比やや多の発生であった（＋）。

(3) 対策

ア 出穂期以降高温が続くと上位葉鞘に病斑が進展するため、発生が見られる場合は防除を行う。



普通期水稻における紋枯病発病株率の推移



3) トビイロウンカ

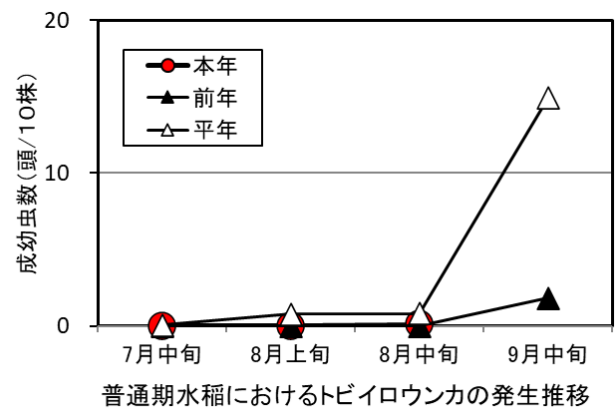
(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 8月の巡回調査では、0.0頭/株（平年0.1頭/株）と平年比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 若齢幼虫期が防除の適期になる。病害虫防除所のホームページに掲載している防除適期情報（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）を参考に適期防除に努める。



イ 水田における発生状況を払落し調査などにより確認する。成幼虫数が要防除密度（収穫30日前 300頭/100株）を超える場合は防除を行う。

ウ 箱施薬剤を使用していないほ場では発生に注意し、適期防除に努める。

エ 水稻の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。

オ 飼料用米等の多肥栽培や栽培期間の長い品種では、特に多発する傾向があるため、発生が多い場合は追加で防除を行う。

4) 斑点米カメムシ類

(1) 発生量：多

(2) 根拠

ア 8月の巡回調査では、寄生は認められず（平年0.0頭/25株）、平年並の発生であった（±）。

イ 合志市に設置した予察灯による調査では、大型カメムシ類の8月第1～4半旬の累積誘殺数が179頭（平年42頭）と平年比多の誘殺数であった（＋）。

(3) 対策

ア 畦畔など周辺雑草の除草は本田への飛来を助長するため、水稻出穂後には行わない。

イ 防除適期は、穂揃い期とその7～10日後（乳熟期）の2回である。2回の防除後に生存虫や新たな侵入が認められる場合は、穂揃い期の14～20日後（糊熟期）に追加防除を行う。

ウ 病害虫防除所のホームページに掲載している防除適期情報（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）を参考に適期防除に努める。

エ 詳細は、令和7年8月20日付発生予察注意報第2号（<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/287980.pdf>）を参照する。



◎大豆

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 8月の巡回調査では、ヨトウムシ類食害株率は10.6%（平年24.3%）、幼虫数は0.3頭／10株（平年2.3頭／10株）と平年比やや少の発生であった（－）。

イ フェロモントラップ調査による7月第5半旬～8月中旬の誘殺数（9月発生の前世代成虫）は、平年比やや少であった（－）。

表 各地域のハスモンヨトウの誘殺状況

市町村名（地域名）	本年（頭）	平年値（頭）	平年比（%）
合志市（栄）	493.5	727.6	67.8
八代市（鏡）	919.1	880.3	104.4
阿蘇市（一の宮）	814.4	882.7	92.3
山都町（鶴ケ田）	56.9	78.7	72.3

※合志市・八代市7月第5半旬～8月第4半旬、阿蘇市7月第5半旬～8月第3半旬、山都町7月第5半旬～8月第2半旬

(3) 対策

ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、若齢幼虫の食害により白色化した被害葉（白変葉）が認められたら防除を行う。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

ウ 病害虫防除所のホームページに掲載しているフェロモントラップの誘殺状況（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）を確認し、防除の参考にする。

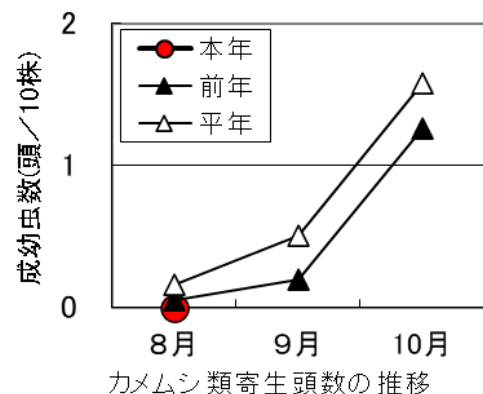
2) カメムシ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 8月の巡回調査では、寄生は認められず（平年0.2頭／10株）、平年並の発生であった（±）。

イ 合志市に設置した予察灯による調査では、アオクサカメムシ、ミナミアオカメムシの8月第1～4半旬の累積誘殺数が174頭（平年48頭）と平年比多の誘殺数であった（＋）。



(3) 対策

ア 開花終期から子実肥大期において、7～10日おきに2～3回の薬剤防除を行う。

イ アオクサカメムシ、ミナミアオカメムシに対するピレスロイド系薬剤（IRACコード：3A）の効果は劣るので、ほ場での発生種を確認して薬剤を選択する。

ウ 病害虫防除所のホームページに掲載している予察灯の誘殺状況（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）を確認し、防除の参考にする。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎茶

1) 炭疽病

(1) 発生量：やや少

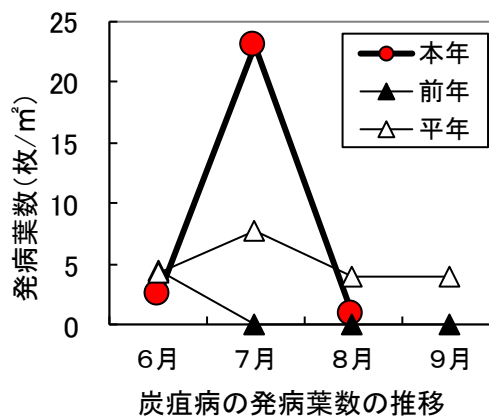
(2) 根拠

ア 8月の巡回調査では、発病葉数 0.9 葉/㎡ (平年 4.0 葉/㎡) と平年比少の発生であった(－)。

(3) 対策

ア 秋期の発生は翌春の一番茶の収量や品質に及ぼす影響が大きいため、摘採残葉の発病状況に注意し、新芽生育期(萌芽～1葉期と2～3葉期)に2回の防除を行う。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) カンザワハダニ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

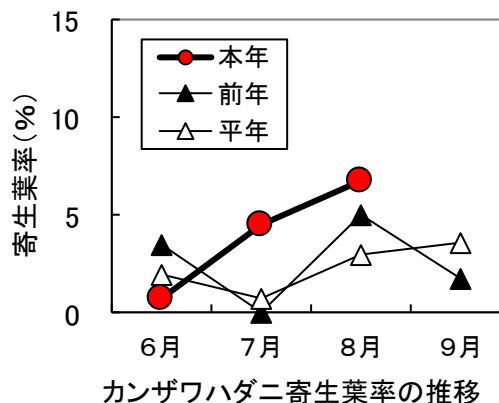
ア 8月の巡回調査では、寄生葉率 6.8% (平年 3.0%) と平年比やや多の発生であった(+)。

イ 茶業研究所(御船町)の8月第3半旬の調査では、寄生葉率 1.0% (平年 6.0%) と平年比やや少の発生であった(－)。

(3) 対策

ア ほ場での発生状況を確認し、密度が高い場合は、規定の散布量で葉裏まで薬剤が届くよう丁寧に防除を行う。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

- ア 8月の巡回調査では、寄生葉率2.5%（平年1.4%）と平年比やや多の発生であった（+）。
- イ 茶業研究所（御船町）のたたき落とし調査では、8月第1～3半旬の捕獲頭数が27頭／10ヶ所（平年127頭／10ヶ所）と平年比少の発生であった（－）。
- ウ 合志市に設置したトラップ調査では、8月第1～4半旬の捕獲頭数が34頭／1ヶ所（平年23頭／1ヶ所）と平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策

- ア 主に新芽や新葉を加害するので、萌芽期から開葉期に防除する。
- イ 有効積算温度シミュレーションによる各地の防除適期は、次表の羽化最盛期となる。

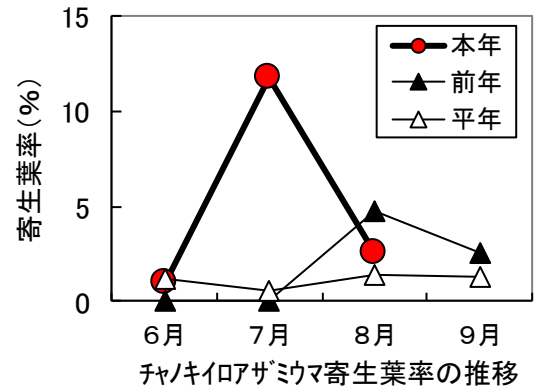


表 チャノキイロアザミウマ羽化最盛期予測結果（8月21日現在）

地点名	本年		平年		平年差	
	第6世代	第7世代	第6世代	第7世代	第6世代	第7世代
鹿北	8月30日	9月20日	8月31日	9月22日	1日早い	2日早い
菊池	8月21日	9月8日	8月21日	9月9日	±0日	1日早い
甲佐	8月22日	9月10日	8月22日	9月10日	±0日	±0日
水俣	8月19日	9月6日	8月19日	9月7日	±0日	1日早い
上	8月25日	9月13日	8月27日	9月16日	2日早い	3日早い

4) チャノミドリヒメヨコバイ

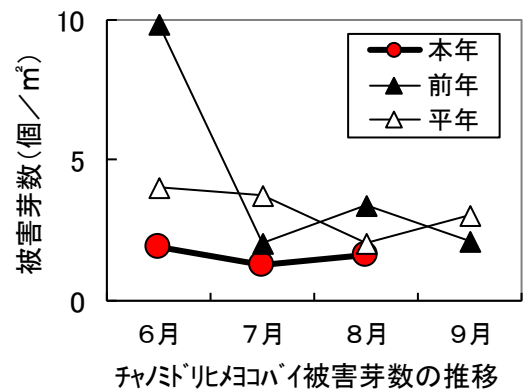
(1) 発生量：並

(2) 根拠

- ア 8月の巡回調査では、被害芽数1.6本／m²（平年2.0本／m²）と平年並の発生であった（±）。
- イ 茶業研究所（御船町）のたたき落とし調査では、8月第1～3半旬の捕獲頭数が2頭／10ヶ所（平年35頭／10ヶ所）と平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策

- ア 新芽が加害されるので、開葉期に防除する。多発する場合は開葉初期と2～3葉期に2回防除する。



5) クワシロカイガラムシ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

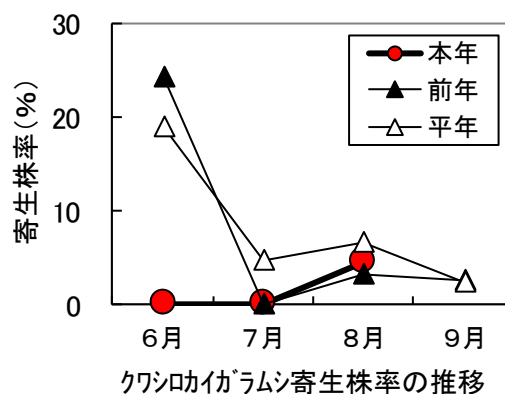
ア 8月の巡回調査では、寄生株率4.4%（平年6.6%）と平年比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア ふ化最盛日は今後の気温により変動し、地域によってばらつきがあるので、ほ場をよく観察するとともに発生状況に注意して防除時期を判断する。

イ 幼虫は農機具に付着して分散する場合もあるので、摘採、剪枝等管理作業で分散しないように十分注意する。

ウ 防除適期は、ふ化最盛期（卵塊全体の60～80%になった時期）で、防除に当たっては規定の散布量を内部の枝まで薬剤が届くよう丁寧に散布する。



◎カンキツ

1) 黒点病

(1) 発生量：多

(2) 根拠

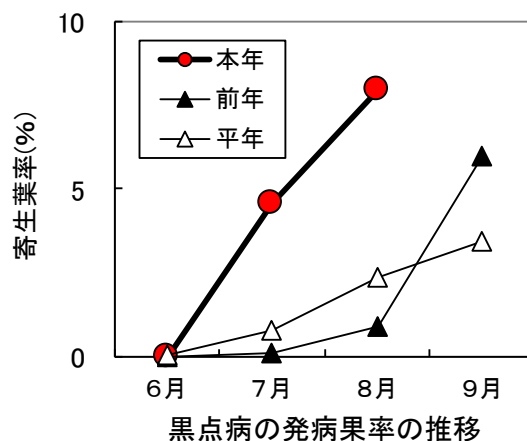
ア 8月の巡回調査では、発病果率8.0%（平年2.4%）と平年比多の発生であった（＋）。

イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、8月下旬の発病果率100.0%（平年100.0%）、発病度51.0（平年42.8）と平年比やや多の発生であった（＋）。

(3) 対策

ア 保菌率が高い直径5～10mmの枯枝はせん除する。また、せん除後もそれらの枝は伝染源になるので、園外に処分する。

イ 前回の散布から累積降水量が200mm～250mmを越えた時期に防除を行う。また降雨が少ない場合は、前回の散布から30日経過したら必ず防除を行う。



2) かいよう病

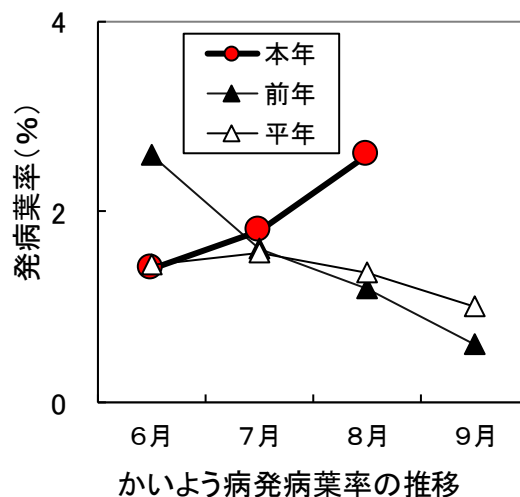
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

- ア 8月の巡回調査では、発病葉率2.8%（平年1.4%）と平年比やや多の発生であった（+）。
- イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、8月下旬の発病葉率13.1%（平年10.2%）、発病果率71.7%（平年39.8%）と平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策

- ア 伝染源となる発病葉や枝などのせん除や薬剤防除を徹底し、幼果への感染拡大を防止する。
- イ ミカンハモグリガの食害痕は、本病が発病しやすいので防除及びせん除を行う。
- ウ 強風による葉や枝の損傷を少なくするため、防風樹がない園では防風網を設置する。



3) ミカンハダニ

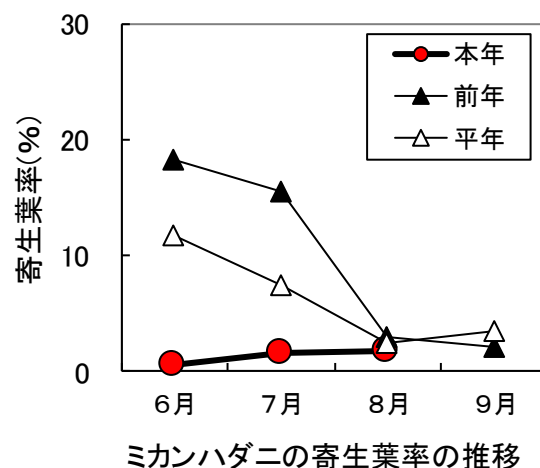
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

- ア 8月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率1.7%（平年2.4%）、寄生頭数1.0頭/10葉（平年0.7頭/10葉）と平年並の発生であった（±）。
- イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、8月第4半旬に雌成虫の寄生葉率11.0%（平年11.5%）、寄生頭数2.8頭/10葉（平年4.3頭/10葉）と平年比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策

- ア 定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30～40%または、寄生頭数が5～10頭/10葉に達したら防除を行う。
- イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

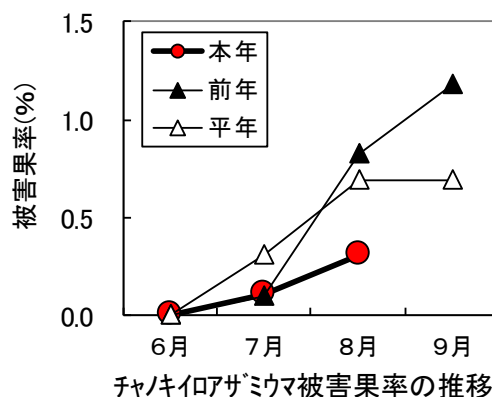


4) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

- ア 8月の巡回調査では、被害果率0.3%（平年0.7%）と平年比やや少の発生であった（－）。
- イ 熊本市河内町の粘着トラップ調査では、8月第4半旬のトラップ1枚あたり捕獲数は0.3頭／日（平年0.4頭／日）と平年比やや少の発生であった（－）。



(3) 対策

- ア 平年に比べ羽化最盛期が早いと予測されるため、次表を参考に早めの防除に努める。なお、最新の情報は病害虫防除所のホームページ (<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>) を参照する。

表 チャノキイロアザミウマ羽化最盛期予測結果 (8月21日現在)

地点名	本年		平年 (10年平均)		平年差	
	第6世代	第7世代	第6世代	第7世代	第6世代	第7世代
熊本	8月15日	9月1日	8月14日	9月2日	1日遅い	1日早い
三角	8月21日	9月7日	8月20日	9月8日	1日遅い	1日早い
本渡	8月22日	9月9日	8月25日	9月14日	3日早い	5日早い
八代	8月17日	9月3日	8月18日	9月5日	1日早い	2日早い
水俣	8月19日	9月6日	8月19日	9月7日	±0日	1日早い

- イ 発生調査は、果実（100果）を5,000～10,000倍に薄めた展着液または洗剤で洗い、ティッシュペーパーで濾した後、ルーペや実体顕微鏡で虫数を数える。捕獲された虫数が10頭を超えた場合は防除を行う。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎ナシ

1) 黒星病

(1) 発生量：やや少

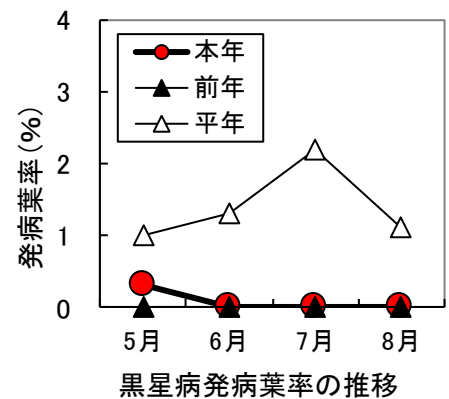
(2) 根拠

ア 8月の巡回調査では、発病葉は確認されず（平年1.1%）、平年比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 秋期の降雨によって感染したりん片や葉が翌春の伝染源となるため、収穫後から落葉期（9月中旬～11月中旬）までに2～3回の薬剤防除を行う。

イ 園内の落葉は、越冬伝染源となるため、園外へ持ち出して処分する。



2) ハダニ類

(1) 発生量：並

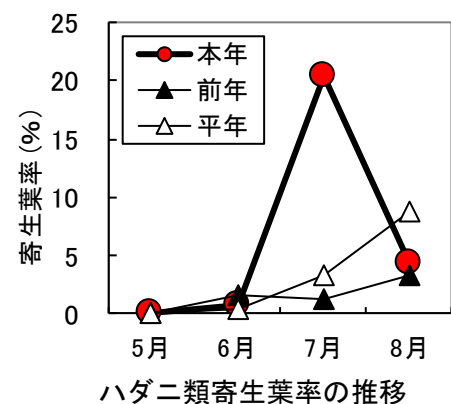
(2) 根拠

ア 8月の巡回調査では、寄生葉率4.3%（平年8.8%）と平年比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 定期的に園を見回り、雌成虫の寄生葉率が30%以上、1葉当たり1～2頭に達したら防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3) ナシヒメシンクイ

(1) 発生量：やや多

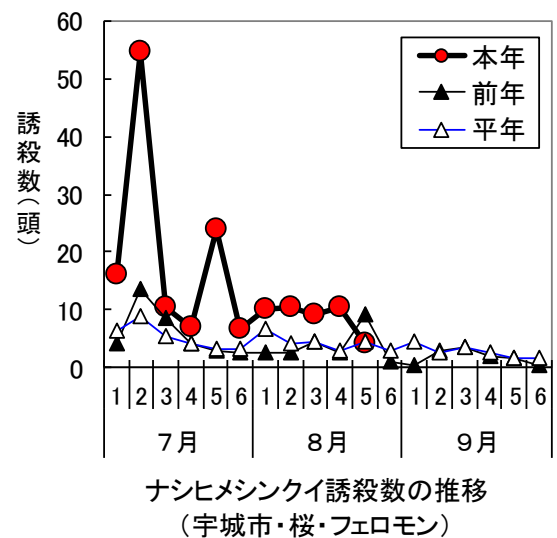
(2) 根拠

ア 宇城市のフェロモントラップ調査では、8月上旬以降の誘殺数が平年比やや多の発生であった（＋）。

(3) 対策

ア 果実の成熟に伴い侵入量が急速に増加し、収穫直前の果実を激しく加害するため、定期的に園を見回り、成虫の発生盛期～10日後頃を中心に薬剤防除を行う。

イ 性フェロモン剤（交信攪乱剤）は、成虫発生初期から設置するが、収穫期が遅い品種では、9月頃には効果が薄れるため、フェロモン剤を追加設置するか、薬剤による防除を行う。



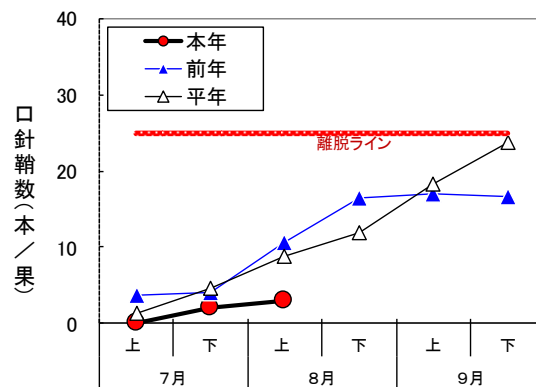
◎果樹全般

1) 果樹カメムシ類

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア ヒノキ球果の1果当たりの口針鞘数が25本に達する時期が、新世代成虫がヒノキ球果から離脱し、樹園地へ飛来する時期の目安となる。8月上旬の口針鞘数は平年より少ないため、球果からの離脱時期が平年より遅く、9月の果樹園への飛来は少ないと予測される（一）。



ヒノキ球果口針鞘数の推移

イ 8月上旬のヒノキ球果に寄生していた成幼虫数は4.2頭／5枝（平年3.7頭／5枝）と平年並であった（±）。

ウ 県内3地点の8月第1～4半旬までの予察灯によるチャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの誘殺数は、合志市が平年並、宇城市が平年比やや少、天草市が平年比少であった（一）。

表 8月第1～4半旬の予察灯によるチャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの誘殺数（頭）

地点名	チャバネアオカメムシ			ツヤアオカメムシ		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
合志市	198	127	156%	15	116	13%
宇城市	491	661	74%	61	312	20%
天草市	1,037	5,051	21%	126	1,214	10%

※合志市は8月第1半旬が欠測、宇城市は8月第3半旬まで。

(3) 対策

ア 果樹カメムシ類は、局地的に飛来し、被害をもたらすことがあるので、定期的に園を見回り、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。特に、山間部や山沿いの園地は被害を受けやすいので注意する。

イ 果樹カメムシ類の予察灯及びフェロモントラップの誘殺数、ヒノキ球果口針鞘数の詳細なデータを病虫害防除所のホームページ (<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>) に掲載しているので、最新の誘殺状況を確認し、防除要否や適期防除の参考にする。

ウ ピレスロイド系殺虫剤（IRACコード：3A）は、天敵等への影響が大きく、ハダニ類の発生を助長するので、最小限の使用にとどめる。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎夏秋トマト

1) 灰色かび病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 8月の巡回調査では、茎葉での発病株率が0.3%（平年9.3%）と平年比少の発生であった（－）。

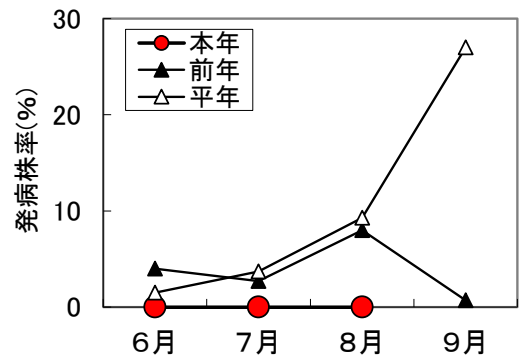
(3) 対策

ア 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。

イ 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

ウ 9月の秋雨の時期に発生が多くなる傾向にあるため、発生が見られたほ場では8月の防除を徹底する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



灰色かび病の発病株率(茎葉)の推移
(夏秋トマト)

2) 葉かび病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 8月の巡回調査では、発病株率1.3%（平年23.4%）と平年比少の発生であった（－）。

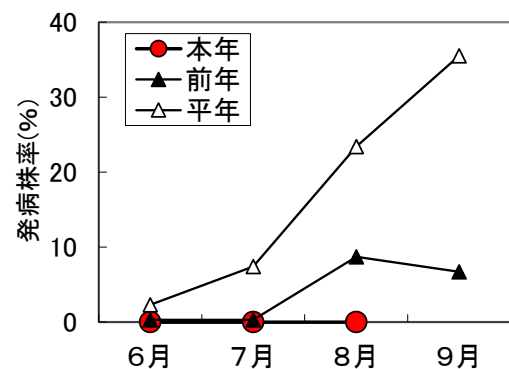
(3) 対策

ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ 気象予報に留意し、発生前から定期的に葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

エ 被害葉や老化葉は早めに除去する。



葉かび病の発病株率の推移
(夏秋トマト)

3) すすかび病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 8月の巡回調査では、発病株率10.3%（平年45.6%）と平年比少の発生であった（－）。

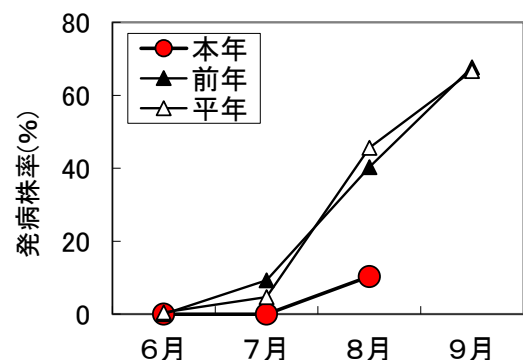
(3) 対策

ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ 気象予報に留意し、発生前から定期的に葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

エ 被害葉や老化葉は早めに除去する。



すすかび病の発病株率の推移
(夏秋トマト)



4) うどんこ病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 8月の巡回調査では、発病株率1.3%（平年11.3%）と平年比やや少の発生であった（－）。

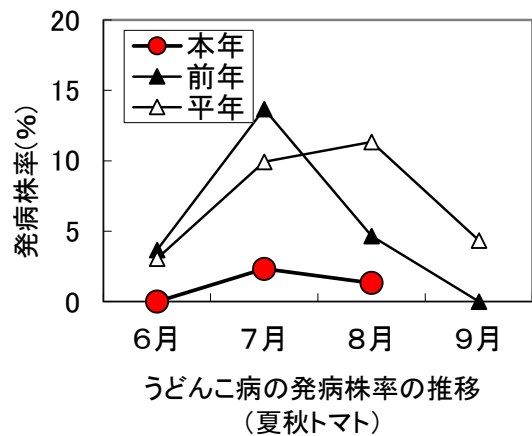
(3) 対策

ア 乾燥条件でもよく発生するので、ハウス内をあまり乾燥させないよう管理する。

イ 発病葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

ウ 多発すると防除が困難となるため、発生初期の防除を徹底する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎イチゴ育苗ほ

1) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 8月の巡回調査では、発病株率0.7%（平年0.0%）と平年比やや多の発生であった（＋）。

(3) 対策

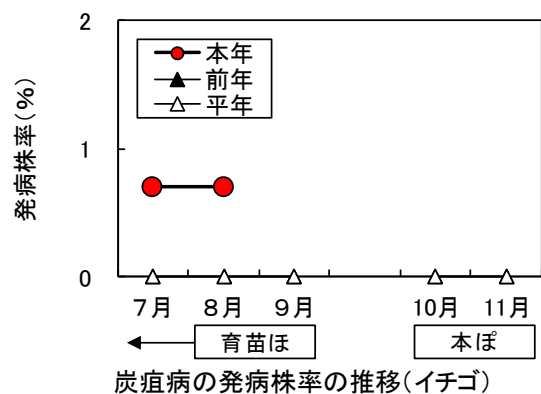
ア 親株床、育苗床はビニルで雨よけをする（3防除のポイント等の「イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう」を参照）。

イ 頭上かん水を避け、株元に手かん水する。

ウ 育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。

エ 発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニル袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

オ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後及び摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。



2) ハダニ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 8月の巡回調査では、寄生葉率9.7%（平年18.7%）と平年比やや少の発生であった（一）。

(3) 対策

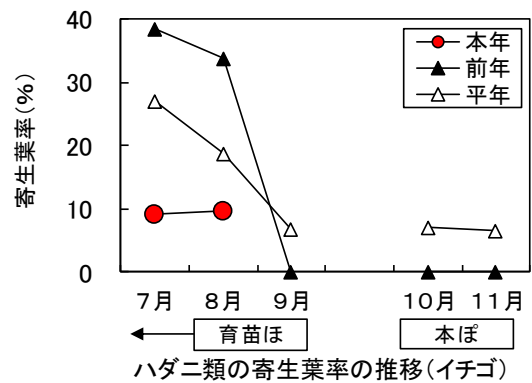
ア 本ぼに持ち込むと防除が困難となるため、育苗期の防除を徹底する（3 防除のポイント等の「イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう」を参照）。

イ 寄生葉を早めに取り除き、ほ場外で処分する。

ウ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期から防除を徹底する。

エ 葉の展開に合わせて適正に葉かぎを行い、薬剤は葉裏にも十分かかるように散布する。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、育苗から本ぼでの栽培期間を通した防除計画を立て、育苗期は気門封鎖剤を主体とした防除を行う。



3) アブラムシ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠

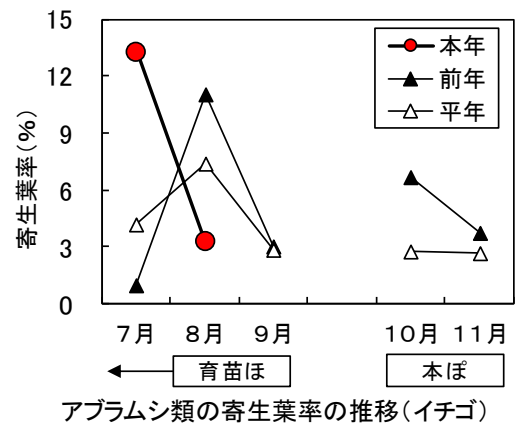
ア 8月の巡回調査では、寄生葉率3.3%（平年7.4%）と平年比やや少の発生であった（一）。

(3) 対策

ア 本虫の寄生した株をハウス内に持ち込まない。

イ 施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎夏秋キュウリ

1) ベと病

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 8月の防除員報告では、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 湿度が高い条件や肥料切れで多発するので、適正な肥培管理と排水に努め、過湿を避ける。

イ 発生後は防除が困難なので予防防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎夏秋果菜類（高冷地）

1) コナジラミ類

(1) 発生量：多

(2) 根拠

ア 8月の夏秋トマトの巡回調査では、寄生葉率20.5%（平年10.9%）と平年比多の発生であった（+）。

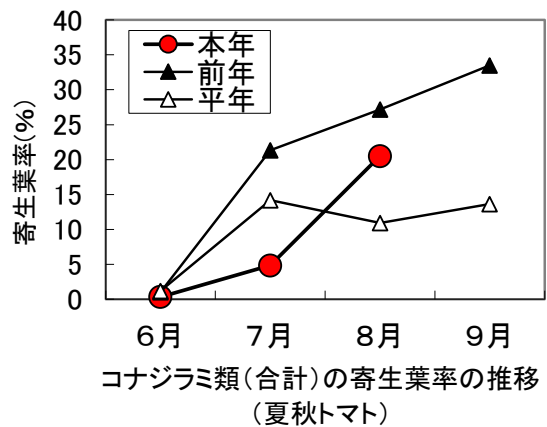
(3) 対策

ア 生育密度が高くなると防除が困難となるので、初期防除を徹底する。

イ 施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎夏秋果菜類（平坦地）

1) コナジラミ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 8月の防除員報告では、秋メロンで平年比やや多、夏秋ナス、夏秋キュウリで平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。

イ 密度が高くなると各发育ステージが混在し防除が困難となるため、初期防除（低密度での防除）を徹底する。

ウ 施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 8月の防除員報告では、夏秋キュウリで平年比やや多～並、夏秋ナス、秋メロンで平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 粘着トラップ等を設置し、早期発見に努める。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類の黄化えそ病の病原ウイルスを、ミカンキイロアザミウマはトマト黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類およびトマトでは本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病対策「入れない」対策を徹底しましょう」を参照）。

ウ 施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎野菜類全般

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 8月の巡回調査において、夏秋トマト、イチゴでは寄生株は確認されず（寄生株率平年夏秋トマト0.0%、イチゴ1.3%）、平年並の発生であった（±）。

イ フェロモントラップ調査による7月第5半旬～8月中旬の誘殺数（9月発生の前世代成虫）は、平年比やや少であった（－）。

表 各地域のハスモンヨトウの誘殺状況

市町村名（地域名）	本年（頭）	平年値（頭）	平年比（%）
合志市（栄）	493.5	727.6	67.8
八代市（鏡）	919.1	880.3	104.4
阿蘇市（一の宮）	814.4	882.7	92.3
山都町（鶴ヶ田）	56.9	78.7	72.3

※合志市・八代市7月第5半旬～8月第4半旬、阿蘇市7月第5半旬～8月第3半旬、山都町7月第5半旬～8月第2半旬

(3) 対策

ア 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

イ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したらただちに除去する。

ウ 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除を行う。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

2) オオタバコガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア フェロモントラップ調査による7月第5半旬～8月中旬の誘殺数（9月発生の前世代成虫）は、平年並の発生であった（±）。

表 各地域のオオタバコガの誘殺状況

市町村名（地域名）	本年（頭）	平年値（頭）	平年比（%）
合志市（栄）	34.0	51.2	66.4
八代市（鏡）	3.1	4.1	76.7
阿蘇市（一の宮）	6.0	9.3	64.3
山都町（鶴ヶ田）	30.4	16.5	184.2

※合志市・八代市7月第5半旬～8月第4半旬、阿蘇市7月第5半旬～8月第3半旬、山都町7月第5半旬～8月第2半旬

(3) 対策

ア 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

イ 1卵ずつ産卵するため、卵での発見は困難である。幼虫は、花や果実、頂芽を好んで加害するため、よく観察し被害が拡大する前に防除する。果菜類では果実内部に、結球する葉菜類では結球内部に食入し、薬剤がかかりにくくなるため、食入前の早期防除を徹底する。

ウ 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

3 防除のポイント等

水稻病害虫防除にあたっての農薬危害防止の徹底について

斑点米カメムシ類やトビイロウンカ等を対象とした防除にあたっては、農薬使用による周辺住民やミツバチ等への危害が発生しないよう、以下の事項を遵守し、危害防止対策を徹底しましょう。

- (1) 農薬を使用する場合は、関係法令等を遵守するとともに、事前に農薬を散布する日時、使用する農薬の種類等について、周辺住民等へ周知を行う。
- (2) 周辺の養蜂家と巣箱の位置や防除計画について、事前に情報を交換する。また、防除を行う際には、「蜜蜂飼育関係集計表」等を基に、巣箱の位置を確認し、ミツバチや巣箱に農薬がかからないよう、ほ場周辺を十分に確認する。
- (3) 農薬散布の際は、散布区域内及びその周辺における危害防止に万全を期するとともに、作業関係者の安全について十分留意する。

台風接近前及び通過後の対策について（茶・果樹）

台風シーズンに入り、風雨により傷ついた樹体は病害に感染し易くなります。また、ヒノキが強風にさらされた場合、ヒノキより振り落とされたカメムシ成虫が強制的に離脱させられた形となり、果樹園に飛来するおそれがあります。台風接近前後は以下の対策を行い、被害防止に努めましょう。

<台風接近前>

（果樹・茶）

- ・伝染源となる発病葉や発病果はできるだけ取り除く。
- ・細菌による病害は、強い風雨により枝葉や果実表面の傷口から病菌が侵入するので、事前に保護効果のある殺菌剤を散布する。

<台風通過後>

（果樹・茶）

- ・速やかに治療効果のある殺菌剤を散布し、病害の発生抑制に努める。
- （果樹）
- ・果樹カメムシ類が突発的に樹園地に飛来することがあるので、園地をよく観察し、早期発見・早期防除に努める。



台風接近時の虫媒伝染性ウイルス病まん延防止対策について

近年、トマトやウリ科野菜における抑制栽培及び促成栽培での虫媒伝染性ウイルス病の多発要因の一つとして、育苗期や定植初期の台風接近に伴って、被覆ビニルを除去したり、定植前の苗を移動させた際に、保毒虫が侵入し、生育初期に感染してしまうことが考えられます。

これからの時期は、トマトやウリ科野菜で抑制栽培の定植や促成栽培の育苗期が始まる一方、野外での微小害虫の密度が高くなります。台風接近時には以下の対策を行い、生育初期のウイルス感染を防止しましょう。

I. 事前対策

- ①被覆ビニルや防虫ネットに破損や隙間が無いか点検し、必要に応じて補修する。
- ②ハウス内の感染株は伝染源となるので、抜き取り適正に処理するか茎を切断する等して枯らしておく。
- ③台風の進路等によっては、ビニルを除去する可能性があるのでコナジラミ類・アザミウマ類の飛散予防策として、防除を徹底し生息密度を下げる。
- ④台風の被害が大きいことが予想される場合、鉢上げ前の播種箱やセルトレイの苗は納屋等に移動する。
- ⑤育苗ハウスから苗を運び出す際には、移動中にコナジラミ類・アザミウマ類が寄生しないよう、運搬車等の荷台を防虫ネットやほろ等で覆う。

II. 事後対策

- ①ビニル・防虫ネットを除去した場合、早急に再度展張する。
 - ②移動しておいた苗は育苗ハウス内に運び込む。
 - ③寒冷紗等の被覆を行った苗は、早急に被覆を除去する。
- 上記の作業が終了したら、すみやかに薬剤散布を行いコナジラミ類・アザミウマ類の防除を行う。



野菜のウイルス病対策「入れない」対策を徹底しましょう

本県では「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「スイカ退緑えそ病」、「トマト黄化えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病原ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これらのウイルス病対策は、ウイルス感染植物を除去することと保毒虫を防除することが基本となります。しかし、薬剤処理による媒介微小害虫の防除だけではウイルス病を完全に抑えることは困難であるため、耕種的防除や物理的防除を組み合わせた総合的な防除対策を講じる必要があります。

特に、これからの時期はトマトやウリ科野菜で抑制裁培の定植や促成栽培の育苗期が始まる一方、野外での微小害虫の密度が高くなり、施設内への飛び込みが更に多くなるため、育苗期や定植直後にウイルスに感染するリスクが高まる時期となります。

そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

保毒虫を栽培ほ場に「入れない」対策

上記のウイルス病は、微小害虫がいなければ感染拡大しません。そこで、野外から微小害虫を施設内に入れないようにしましょう。感染が早いほど経済的被害が大きくなるため、特に育苗期の対策はしっかり行いましょう。

1 育苗期

- (1) 育苗ハウスは、本ぽと別に設け、ハウスの開口部(サイド、換気部など)には必ず目合い0.4mm以下の防虫ネットで、天井部は近紫外線除去フィルムで被覆する。
- (2) 雑草および野良生えは微小害虫のすみかとなるため、育苗開始10日前までにハウス内・周囲から除去する。
- (3) ハウス内に粘着トラップを設置し、侵入した害虫の密度を低下させる。
- (4) 発病株は二次伝染源となるので、見つけ次第直ちに施設外に持ち出し処分する。
- (5) 定植2～3日前に、育苗期後半に登録のある薬剤を処理する。

2 本ぽ定植以降

- (1) サイド開口部は目合い0.4mm以下(アザミウマ対策の場合は目合い0.8mm以下)の防虫ネット、谷換気部は、目合い1mm以下の防虫ネットで被覆する。
- (2) ハウス周辺に雑草および野良生えが残っていると、微小害虫が飛び込みやすくなるため定植10日前までに除去する。
- (3) 育苗ハウスから本ぽへ苗を運ぶ際には、野外の微小害虫が付かないように運搬車等の荷台を防虫ネットや幌等で覆う。また、定植作業中は、出入口をきちんと閉めて作業する。
- (4) 育苗期後半に薬剤処理ができていない場合には、定植時に登録のある薬剤を必ず処理する。



イチゴ定植前のハダニ類、炭疽病及びうどんこ病の防除対策

イチゴはこれから定植がはじまります。重要病害虫であるハダニ類、炭疽病、うどんこ病は定植前の防除を徹底して、り病株、寄生株を本ばに持ち込まないことが重要です。以下の防除対策を徹底して、定植後の発生を抑制しましょう。

1 ハダニ類

- (1) ほ場内および周辺の雑草は定期的に除草する。
- (2) ハダニ類は下葉の裏に多く寄生しているので、老化葉は積極的に除去する。
- (3) 除去した下葉は、ほ場外に持ち出し、速やかに処分する。
- (4) 薬剤防除の際は、薬液が葉裏に十分かかるように、苗の間隔を十分確保し、丁寧に散布する。
- (5) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、気門封鎖剤などの物理的な防除効果を持つ薬剤を積極的に活用する。気門封鎖剤は、ハダニ類に直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、卵への効果や残効性が無いため、7日程度の間隔で複数回散布する。なお、気門封鎖剤は、高温時など薬害が生じやすい条件での使用は避ける。
- (6) 殺ダニ剤は、同一系統薬剤の連用を避け、育苗から本ばまでの栽培期間を通し計画的に使用する。
- (7) 本ばで天敵（チリカブリダニやミヤコカブリダニなど）を利用する場合は、薬剤の使用にあたって、使用する薬剤の天敵への影響日数に注意する。

2 炭疽病

- (1) 定植までは育苗ほの雨よけを必ず行う（寒冷紗は雨よけにならない）。
- (2) 育苗床が冠水しないように排水対策を講じる。
- (3) 頭上かん水は避け、株元に手かん水する。
- (4) 定植まで定期的に薬剤防除を行う。特に、降雨後、摘葉後は感染しやすいので必ず防除する。
- (5) 発病株は速やかにほ場外に持ち出し、ビニル袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。
- (6) 苗不足により、緊急的に苗を確保する場合は、炭疽病が発生していないほ場から確保する。
- (7) 台風接近時には、育苗中の苗は可能な限り納屋等の屋内に移動させる。万一、移動ができない場合は、苗を防風ネット等で被覆し軽く押さえるように固定するとともに、台風通過後は、速やかに被覆資材を除去し薬剤散布を行う。

3 うどんこ病

- (1) 発生しやすい葉裏を注意して観察し、初期発生を見逃さないように努める。
- (2) 発病葉や不要な下葉は早めに取り除き処分する。
- (3) 定植前に薬剤防除を徹底する。薬剤は葉裏に十分かかるように散布する。
- (4) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



Ⅲ 【その他の病害虫】

作 物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項等
		平年比	
大豆	べと病	並	防除員報告では、平年並（±）。 湿度が高いと発生が助長されるため、降雨後、発病が拡大しないうちに防除を行う。
	葉焼病	並	防除員報告では、平年並（±）。 防除が遅れると効果が低下するので、発生が確認されたら直ちに防除を行う。
茶	チャノホソガ	少	巡回調査では、平年比少（－）。 フェロモントラップ調査は平年比少（－）。 新葉が加害されるので、開葉期と2～3葉期に防除を行う。
	チャノコカクモンハマキ	並	巡回調査では、平年比少（－）。 フェロモントラップ調査は平年比やや多～並（＋）。 ほ場を見回り発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫を対象に防除を行う。
カキ	炭疽病	並	防除員報告では、平年並（±）。 発病枝は園外で処分し、病原菌の密度を下げる。 発病後の防除では効果が低いので、予防散布を徹底する。
夏秋トマト （高冷地）	黄化葉巻病	やや多	巡回調査では、コナジラミ類が平年比多（＋）。 防除員報告では、平年比やや多（＋）。 タバココナジラミが病原ウイルスを媒介するため、定期的に薬剤散布を行う。発病株は抜き取り、適切に処理する。
夏秋ナス （平坦地）	すすかび病	並	防除員報告では、平年並（±）。 発生後の防除は困難なため、激しい風雨が予想される場合には事前に薬剤散布を行う。
夏秋 キュウリ （高冷地）	うどんこ病	並	防除員報告では、平年並（±）。 発生を認めたら、直ちに薬剤散布を行う。
イチゴ 育苗ほ	うどんこ病	並	巡回調査では、平年並（±）。 防除員報告では、平年並～やや少（±）。 初期発生を認めたら直ちに薬剤散布を行う。
【野菜病害虫の共通対策事項】 ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める（病害）。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。			



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病虫害防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)
(TEL : 096-248-6490) にお問い合わせ下さい。

※なお、本文はホームページ「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」上に掲載しています。

